

日本の美術鑑賞学習メソッドの開発研究 — 仏像鑑賞における「迎角」—

水野谷 憲郎

(2009年10月22日受理)

要 約

鑑賞教育では、我が国の美術は重点課題である。ここでは仏像を取り上げ、その立体造形といかにであることが出来るかを問う。その意味で仏像には不自然な傾斜を持つものが多い。東寺講堂四天王像は持国天、増長天が前傾し、広目天、多聞天が後傾している。これを「迎角」と呼称し、最良の角度を提供するためのものであると結論した。

キーワード 最良の角度、迎角、前傾、後傾、射影、比例、正対

1 研究のねらい

鑑賞教育における問題は、大別して二つある。ひとつは、鑑賞とは何を学習することか¹⁾、という問題。言い方を変えるなら、どのような力をつけることか、という問題である。分かり切っているようで、案外決着しているようには見えない。筆者は、鑑賞という行為そのものが、本来多義的なものと見ている。そしてもう一つは、鑑賞の方法の問題である。本物との出会い方である。対話式であったり、模写したり、いかにその良さと出会うかを工夫する問題である。後者については、様々な鑑賞方法が提案され、手法は多岐にわたる。だが、前者の問題は、後者の手だてによって根本的な違いを生むことも確かだ。例えば、絵を眺めている場合と、実際に模写している場合では、気付く事柄が全く違う。他者と対話しながら見る時と²⁾、ひとりで見る場合では、気付きの展開も、またその味わい方も、変わって来るであろう。触って良い作品と、目だけで見る作品とでは、全く違う感覚を覚える。従って、後者の鑑賞方法で、さらにどの様に対象と出会っていくか、という問題は、また、どのような鑑賞力を養うのか、と言う問題を左右する、重要な問題となる。ここでは、日本美術における仏像を対象に鑑賞していくにあたり、いかに仏像という立体造形によさと出会うことができるか、という美術的鑑賞方法の問題について、考察していくことにした。

1

2 仏像の特性と研究対象としての東寺講堂四天王像

何故仏像鑑賞なのか、ということは、改めて説明することではないかも知れない。近年静かなブームが訪れている。本屋さんの書棚には、必ず仏像鑑賞の手引きなるものが並んでいる。文部科学省は「わが国の美術」³⁾として、日本の美術鑑賞教育を重点課題として示している。筆者は、そうした時勢に合わせたわけではない。長年中等美術科教育に関わり、毎年、修学旅行を担当してきた経緯⁴⁾から、そこで得た、鑑賞における、幾つかの問題を、解明していきたいと考えたからである。またその結果、仏像という立体造形の魅力によりよく触れ、「わが国の美術」鑑賞に少しでも寄与できれば幸いと考え、本論考を執筆することにした。

では、どのような問題であるかを述べる。

中学生を、奈良に連れて行くと、まず大仏に感動する者が多い。あの大きさには、驚かざるを得ない。が、鑑賞が深まってくると、その好みは変化する⁵⁾。この大仏について、次のような一文に出会った。「…しかるに仏頭を下から排していると、江戸期の造形力の弱さを感じられるし、返り花の造形にも天平期の大らかさや強さが無い。仏顔に関しては、それを排する角度がまことに悪く、下から眺めあげるに都合良い顔にはできていない。百三十三片を鑄継ぐ時に角度のゆがみができて、正面からは扁平に見えるようになってしまったことによる。大仏殿の側面の高所から排すると、まったくそれとは異なった美しい相貌に排せることを近頃知った。参拝者は常に最悪のアンクルから大仏を排しているのである。(傍線筆者)」(前田泰次⁶⁾)とある。最悪のアンクルから見ているのだという。同感である。逆に言えば、本来仏像は、最良のアンクルなるものを、意図的に仕組むものだと言うことである。例えば、薬師寺東院堂に聖観音菩薩像⁷⁾がある。この仏像は、日本で最も美しい聖観音像、と言われるだけあって、そのすらりとした立ち姿、たおやかで、ひきしまったマツス、若々しく気品溢れるお顔など、どこをとっても見事な像である。この像、機会があったら正面から徐々に目を移し、脇に回って斜め横からみてほしい。厨子から僅かに出た側面は、がらりとイメージを変え、腹が前にせり出し、胴体は相撲取りのように太めであることに気付くはずである。本像が造られた当時、日本は、白鳳様式という初唐様式から、でっぴりと肉付きの良い、盛唐の様式に変わる頃と言われる。仏師が、発願に合わせて、正面像を擬古的にほっそりとスマートに造り、普段、見ることの少ない側面や背面に、時代の最先端である盛唐様式の肉付けを試みたとしても、不思議はない。逆に言えば、それだけ正面という、特別な場所があるということになる。さらに、次の一文は、筆者の執筆内容に直接触れるものだ。「…よく写真なんかで真正面からカメラ位置を高く撮影された仁王さんの姿を見ると、上半身が大きくて、なんとなく間延びしたアンバランスな印象を受けるんですが、実際にあの場所に立って下から見上げると、プロポーションがピタとあう。たぶん寝かした状態で荒彫りしたのでしょうか、運慶は立てた時の遠近法的な効果まで計算していたのです。」(傍線筆者)」(熊田由美

子)⁸⁾というものだ。ここで言う仁王は、東大寺南大門仁王像のことである。下から見上げる場所は、南大門の中央たたきの部分である。仁王像は、一般的に、外に向かって立つ。だが、この仁王像は違う。阿吽の二体が向かい合う形になっている。だから、門の中央から左右に仁王を見上げることになるのだ。何故向かい合うかについては、大きな像が正面に向かえば、雨風をまともに受けて痛む。現状のように、二体が向かい合うようにして、像の置かれた建物の正面側は板で塞いで守るのだという。だが、もっと積極的な意味があると筆者は見ている。守るのではなく、むしろそこに、最良の贅沢な空間をつくりたかったのではなかろうか。まさに、南大門の中央を通り抜けていく参拝者から見れば、同時に、あの限られた空間の中で、巨大な二体もの仁王像に囲まれるのである。8メートルあまりの巨像を、真下に近いような所から見あげても、美しいバランスや比例を見せることができる、という、揺るぎない運慶、快慶達仏師⁹⁾の自信の現れであり、そこに特別空間を現出させようとしたのではなかろうか。

これらのことから、仏像は、その正面像に、最良のアングルを仕組むものだと言える。これは一定の場所に置かれて、一定の場所から拝まれることを考えれば、当然のことでもある。その一定の場所から見られる正面像に、特別な工夫が行われていると言うことだ。言い換えれば、よりよいアングルを生み出すために、側面が、奉仕させられているのである。仏像には、最良のアングルという拝観する位置があるのであり、そこに、仏師の求めた美が、凝縮していることになる。であるならその場所は、是非とも見つけ出したい。でなければ、仏像が持つ、最良の美を見逃していくことになる。

美術館や博物館の仏像や、後から客仏として置かれた仏像などは、往々にしてこの本来の居場所を失い、不安げにいらっしやることが多い。最良のアングルを失っていることがあるのだ。

仏像という立体造形に出会うためには、この最良のアングルを見逃すわけにはいかない。そして、その最良のアングルの所在は、奈良の大仏や聖観音菩薩像、そして南大門仁王像の造りから、その像の比例や側面を見れば、伺い知ることが出来そうである。以上から、筆者は、仏像の最良のアングルを探す一方、そのようなアングルを作り出す仏師の意図を求め、比例や側面を気にかけてきた。その中で注目する像がある。京都の東寺講堂にある四天王像¹⁰⁾を側面から見てほしい。(図1-2、1-3参照) 実に興味深い姿形をしている。持国天、増長天は前に傾き、広目天、多聞天は後ろに振り返るのである。中学生に、四天王像の側面を見せながら、「何故このように倒れているのだろう」と問いかけたら、その生徒は、講堂内にある売店に行き、「何故四天王像は倒れているのですか」と聞いたらしい。すると「うちの仏さんは倒れてなんかいないよ」と言われてしよげて帰ってきたことがあった。筆者は、ここに答えが在ると見ている。あるところから見れば、見事に立っているのであり、それ故に、側面観は、倒れるのだ。これだけ傾くとなると、立つこと自体が困難である。その冒険をしながら立たせているのだ。だからこそ、ここに意図的な拝観者への見せ方をしくんだ仕掛けがあると見た。そこで、本小論では、この東寺講堂四天王像の傾きについて調

べ、そこに最良のアングルが求められるかどうか、ということについて考察していくことにした。

3 研究主題について

本小論のねらいは、仏像が、最良のアングルを見せるために、意図的に、比例や傾きを工夫しているかどうかにある。そして仏師が意図した、比例や傾きの先にあるものは、鑑賞において見逃す訳にはいかない、最良のアングルに関わるものである。仏像が持つ傾きを、仏像の最良のアングルを作り出すための工夫であり知恵であるとするなら、それは、拝観者の視線を迎えていくための、形の工夫でもある。その意味で、仏像が、如何なる形にしてあるのか、いかなる傾きを、与えられているのかを追究していくと言うことは、仏像が拝観者の視線を、いかに迎えていく形を持つか、ということ明らかにしていく問題である。従って、この拝観者の視線を迎えていくフォルムの問題として「迎」を使い、仏像が有する適正な比例を見せたり、適正な形を見せたりするための傾きを「迎角」と呼ぶことにした。そこで、ここでは、東寺の講堂四天王像が有している傾きを対象に、これらの傾きが、四天王像の最良のアングルを生み出すための「迎角」であるかどうかを探る研究となる。そこで本小論の副題を「仏像鑑賞における『迎角』」とした。

4 東寺講堂四天王像の「迎角」についての研究の進め方

東寺講堂四天王像における「迎角」の存在とそのあり方について調べていくにあたり、次のような事柄が問題となる。

- ① 東寺の講堂四天王像の造形上の傾きを調べ、それが最良のアングルを生み出すための仕掛けとしての「迎角」であり、そのために、あえて、側面における姿形は、矛盾を生みだしていると言うことを、証明していくこと。
- ② 東寺講堂四天王像が、創建当初からその形、立ち位置が変わらず、同じ場所に置かれていること。そうでなければ、それぞれが今置かれている位置で仕組まれた形ではなくなる。即ち、これらの像が、違う彫像であり、違う位置に立たされているとなると、創建時の仏師が意図したものとしてみることができなくなり、そこに置かれた意味や造形的に統合された意図的空間構成の意味を問えなくなる。
- ③ 仏像には正面像を意図的にしくむために、側面観を变形していることがあるという事例を集めること。言い方を変えれば、意図的に傾けていく造像の仕方が他にもあるということ。意図的に正面観を造りだしていくことが仏像造像において、自明に行われていることを例証していくこと。

以上である。本年はその第一次として①と②について進めていく。なお③について

は、調査の進捗状況の許す範囲で述べていくが、今後継続すべき課題である。

5 東寺講堂四天王像の「迎角」

5-1 東寺講堂四天王像の概要

東寺講堂四天王像は承和6年、西暦839年頃に出来た¹¹⁾、と見られている。平安時代初期である。東寺講堂に、今見ることが出来る21体の諸尊は、空海の構想の下に、立体曼荼羅として造像（現在21体のうち15体が創建時のもの）されたものだ。四天王像は、創建当初のものであり¹²⁾、多少多聞天が、修理によって、当初の趣を損なうところは、あると見られている。空海存命中には間に合わず、死後、ようやくできあがったという。それだけに、そこには、空海が意図した立体曼荼羅としての最後の形を添える、造像上の優れたしかけが仕組まれている可能性は、大きい。

東寺講堂四天王像の配置は、[図1-1～1-3](#)に示した通り、東南に持国天、西南に増長天、西北に広目天、東北に多聞天が置かれている。それぞれの背丈を下記する。

	総高	像高 (cm)
持国天	217.2	187.7
増長天	222.5	182.5
広目天	200.0	167.7
多聞天	196.7	162.0

（「日本彫刻基礎資料集成 平安時代」より）¹³⁾

これらの像が、創建当初と同じ形であり、同じ位置にあるということについては、後で考察する。あくまでも現状が、創建当初の位置と同じであり、像自体も、作り替えられていないか、ほとんど、当時のまま、ということをも前提に見ていくことにする。

5-2 東側に立つ持国天と多聞天の傾き

[図1-2](#)は持国天と多聞天を東側から見た図である。BCは筆者の描いたものであり、矢印が重心を示している。[図3](#)講堂内陣須弥壇は「東寺の建造物」¹⁴⁾に掲載されたものを参照している。寸法はその図に記載されている尺を参考に描いた。図示するに当たり、各像の背丈は「日本彫刻基礎資料集成 平安時代」に記載されているメートル法を使った。一見して分かると思うが、前方にある持国天は前に傾き、後方にある多聞天は後方に反り返っている。この立ち方がいかに不自然であるかは、人の重心の問題を見れば分かる。

[図2](#)を見てほしい。人が立つと言うことは、重心が頭頂から、傾きを調節しながら、しっかりと主脚の上、言い換えれば、主脚の足の甲に、おりにことである。ここをずらせば、立てない。では[図1-2](#)、[1-3](#)の図BCFGを見てほしい。頭頂からおろ

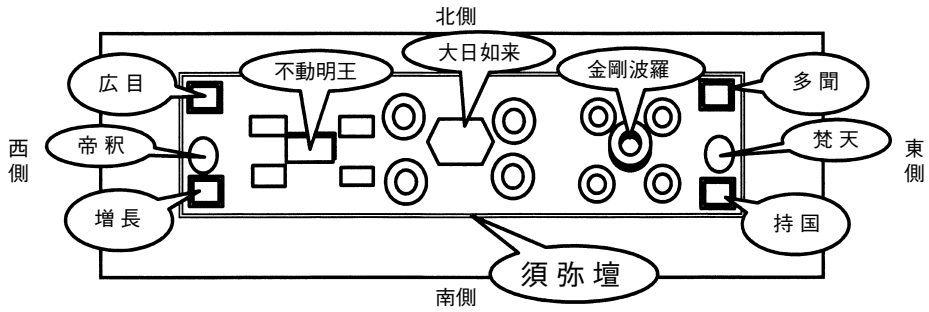


図1-1 現在の東寺講堂平面図

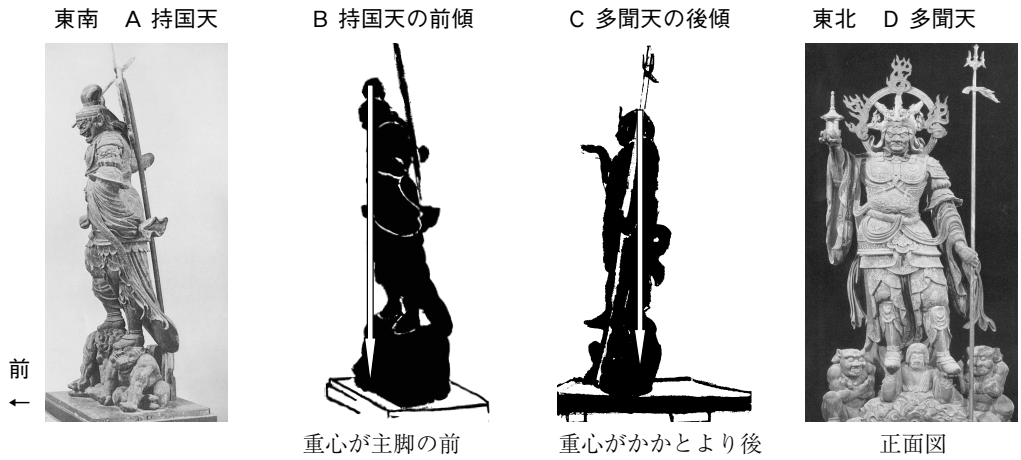


図1-2 東側

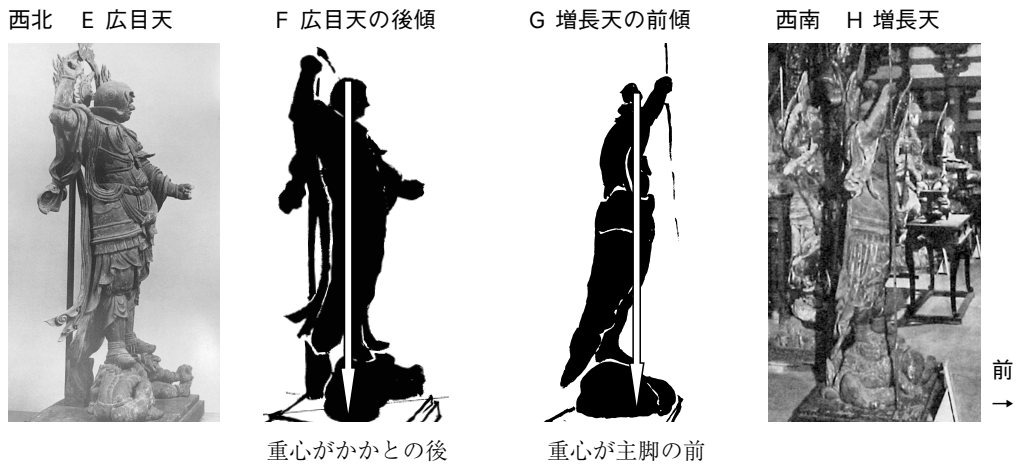


図1-3 西側

* ADEHの写真資料は東寺及び「日本彫刻基礎資料集成 平安時代」より

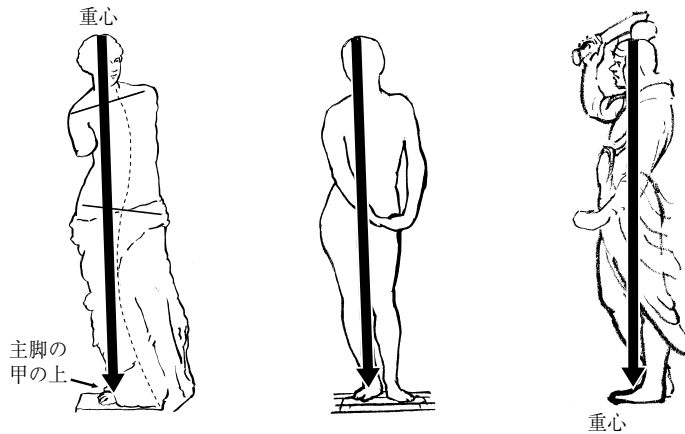


図2 人の立ち方と重心 (筆者画)

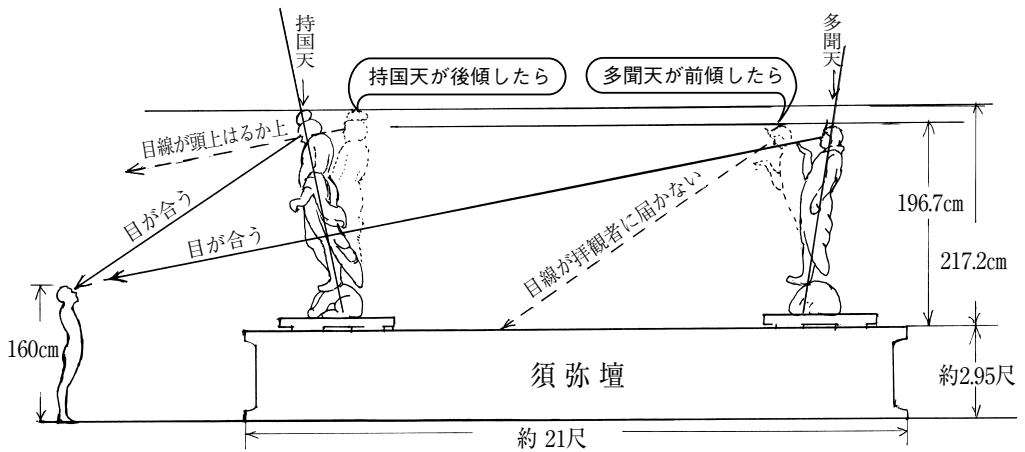


図3

した重心は、どこに落ちているのだろうか。前方に立つ持国天は、足先である。主脚の前方である。後方の多聞天はかかとの後ろである。とても立てない。このような問題を、当時の優れた仏師が、知らないわけがない。だが、はずれている。以下何故なのかを追究していく。どうにか重心がのるのは増長天であるが、その形が持つ前傾は確かだ。

まず持国天から見てみよう。重心のずれ (図1-2 A、B、図4-3参照) に合わせて、フォルムも、一定の方向に凹凸をゆがめて彫り込まれている。例えば眼球の固まりの頂点が、どこを向くかという、前方下の方向に、向いている。(図4-1) この目が向いていく方向が、また各部分の肉付けの固まりが向かう方向でもある。図4-2は正面像であるがやや下向き目線として写し出されている。もう少し下、即ち、目線の降りるところから拝観者が見れば、持国天と正対できる。ここから撮影す

持国天



図4-1 正面



図4-2 頭部



図4-3 側面

*図4-1～4-3は東寺及び「日本彫刻基礎資料集成 平安時代」より

れば、より自然な比例と形になるはずである。ということは像の前方、低い所から見上げるとよい。実際拝観者は持国天を90センチ程の須弥壇の、さらに上方に見上げるのである。その視線を受け止めるべく前に傾いていると見た。

次に多聞天はどうであろうか。

正面の写真からも伺えるのだが、明らかに後ろに、反り返っている、この像、側面の写真を諸事情で得られなかったため、筆者が描いた図1-2Cと図5-2で見たい。重心はかかとの後ろである。

では、何故、後方に倒さなければならなかったのだろうか。図3を見てほしい。この図は先述した像の目が向いていく方向を示したものである。持国天と比べると、かなり水平になっていることに気付かれたであろうか。多聞天の目の向かう先は、須弥壇前方拝観者の目の高さにあたる(図3参照)。拝観者は160cmの背丈でシミュレーションしている。即ち、須弥壇前に拝観者が居たなら、そこから持国天も多聞天も同時に自然なプロポジションで立ち上がる姿を拝めることになる。多聞天の側面観は後傾していた。がそれは、はるか前方から見ることになる拝観者の目に応えるために、あえて傾けたものであると結論した。もし、後方の多聞天を持国天と同じように、前に傾けたらどうなるであろうか。前に傾けば、像の目線は、すぐ下に落ちていく。即ち、拝観者の目まで届かない。ということは、形は前に倒れて沈んでいくように見える。そこで、後方にある多聞天は、意図的に、後傾させたとみえる。その結果、目は上向きになり、拝観者へと届いた。逆に、多門天のような後傾を、前に立つ持国天に与えたらどうなるであろう。90センチ程の高さを持つ須弥壇上に立つ像が、さらに上を向

多聞天



図5-1 正面



図5-2 (筆者画)

*図5-1 東寺 講堂立体曼陀羅より

くのだから、益々鼻の穴かあごの下か、あるいは、おなかの下側しか見えなくなり、とても顔を拝することは、できなくなるばかりではなく、後方に倒れていくようにさえ感じるであろう。以上から、ここに、さりげなくしくんだ傾き、前に立つ持国天は前に、後ろに立つ多聞天は、後ろに傾けることで、拝観者の目に正対する彫像を、作り上げたことになる。

5-3 西側、増長天と広目天の傾き

次は、西側の増長天と広目天も、東側で見た傾きが、見られるであろうか。同じように傾いていれば、それは当時の仏師集団が、意図的にしくんだ造形的仕掛け、といって、良いのではなかろうか。では東側同様に、[図1-3E~H](#)を見ていただきたい。

西側から撮影した写真と筆者の描いたF図とG図である。増長天は、何とか重心が乗っているが、明らかに前方に傾く。そして各部分の形の頂点はどこを向いているだろうか。顔の向きは、やはり前方下部である。眼球の頂点は、下方向かって右に向く([図6-1](#)、[図6-2](#))。拝観者の見あげる仰角に呼応しているのであろう。このように、前に傾くことで、この像を低い位置から拝観すると、この像の、的確な比例や凹凸と出会える。

最後に、広目天を見てみよう。西北に置かれており、ある意味で拝観者が、講堂に東側から入るとなると、最奥に置かれていることになる。広目天の反り返り具合を[図7-1](#)で見てみよう。

重心は、完全に後方に落ち、実際なら、後ろに倒れる。かろうじて、後背に寄りか

増長天



図6-1 側面



図6-2 正面

* 図6-1 東寺及び「日本彫刻基礎資料集成 平安時代」より、図6-2 東寺より

広目天



図7-1 側面



図7-2 正面

* 図7-1～7-2 東寺及び「日本彫刻基礎資料集成 平安時代」より

かっているかのようなのである。この後傾は、多聞天と同じ意味を持つことは、その目の向かうところを見れば、一目瞭然である。後方に在るが為に、後傾させられている。そうしなければ、後方からかなり距離のある前方の拝観者に目が届かない。即ち、自然で美しい立ち姿を、拝観者は見ることが出来なくなる。

以上、側面に現れた不可思議な傾きは、須弥壇まへの拝観者の視線を受け止めるものだ、と言うことが分かった。即ち、意図的に傾けることで美しい姿を拝観者に提供しているのだ。がしかし、改めて正面像をそれぞれ見てほしい。筆者は真正面から撮影した各四天王像どれもが微妙に決まっていないと感じている。広目天は向かって左に倒れ、多聞天は重心に乗り切れていない。最良のアングルはさらに東西の間のどこかにある。そのヒントは創建時、如来像は大日如来像を中心に向かい合っていたという記述にある。この向かい合っている像のそれぞれを見通せる場所がふさわしい。そこからまた四天王像を見てほしい。だがこの確証となる写真撮影の許可をまだ得ていない。最良のアングル調査はひとまずここまでにする。

その上でもう一つ問題がある。東寺講堂は、後方の広目天と多聞天の方が、前に立つ持国天と増長天より20センチも低い。遠方が低く見える、という原理から考えれば、拝観者から遠いこれらの像を、高くしたくなる。実際、東大寺戒壇院四天王像（天平時代）は広目天と多聞天の方が前に立つ持国天や増長天より背が少し高い。一方、東寺のように、後方を低くすると言うことは、その空間が、一層広々としてくるということだ。遠近効果が生まれる。だが、ここで問題となるのは、前に立つ像より、低い像が、なおかつ遠方にあると、どのように見えてくるのか、という問題である。それこそ、見下ろされたようになり、像のスケールは、感じられなくなる。堂内の広がりを見せながら、同時に、像の大きさも見せる、ということは、矛盾した願いである。こうした難題に、1つの解となるものが後傾であった。後ろに傾けることで、彫像の目の向かう方向は上向きになり、結果として、前方で拝観する人の目に届き、拝観者は後方に堂々と立ち上がる像を感じ取ることとなる。後方に振り返ることで、見上げるように感じさせるのだ。このように、背の低い像を実際、後傾させて大きさを出している例がある。写真を紹介できないが、東大寺誕生釈迦像は一般成人の目線より低いため、後傾させている。ぜひ側面から見てほしい。これで、東寺講堂内で、中学生が「…何故倒れているのですか」と聞いたら、「…倒れてなんかいない…」と言われた、ふたりのやりとりのそれぞれが、意味することが見えてくる。中学生は側面から見たのであり、堂内の職員の方は、前から見たときの、立派に立ち上がる四天王像を、思い浮かべていたのである。

以上から、東寺講堂四天王像は、現在おかれた場所に相応しい傾きと比例を有し、須弥壇下を通る拝観者には、自然に、最良のアングルを用意し続けてきたことになる。そのために、側面から見ると、自然な重心や形状・バランスが変えられていたのだ。となると、今解釈した、最良のアングルと、そのしかけは、現講堂に合わせて仕組まれている。とすると、現講堂そのものが創建当初の、広さや構造と同じでなくては

はならない。現在の東寺講堂が、創建当初と同じ規模、構造を維持していることが、確認されなければ、四天王像の傾斜は偶然の結果であり、たまたまそのような配置が、効果を発揮したということにもなりかねない。東寺講堂が、創建当初から変わっていないことを、確かめていかななくてはならない。以下に述べていく。

5-4 現東寺講堂と創建当初の講堂は同じ規模を有しているか

東寺宝物館発刊の「東寺の建造物」¹⁵⁾によると、「創建当初と同じ基壇に建てられ、礎石も同様である。」と記載されている。また、「日本彫刻基礎資料集成 平安時代」所収「伝来 1. 東寺草創41頁」¹⁶⁾によると、天長2年(A D825年)に竣工され、その後何度か災禍に会い、倒壊したりしたがそのつど修復され、今日残る遺構は創建当初の姿が踏襲されており、特に、昭和29年の解体修理の結果、漆喰に覆われた須弥壇の一部から創建時の規模が保存されていることも明らかとなったとのことである。従って、須弥壇も講堂の規模も創建当初の大きさと構造を維持していることは、既に疑問の余地のないところであろう。ただ筆者が見た本の中で一つ「講堂は変わっている」という記述があった。それによると「この講堂は延久元年(1069年)11世紀の半ば過ぎに大風が吹きましてこのお堂は崩壊します。そしてのちにひとまわり縮めて七間四面になりました。…これは…『東宝記』の灌頂院の項にきちんと記されています」¹⁷⁾(真鍋俊照)である。この本から筆者は、空海と美術における豊かな関係を知り、多くを学ばせて頂いている。がその中で、唯一疑問に感じたところでありお教え頂けると幸いである。確かに「東宝記」を見ると、建久年間の講堂の條には、7間4面と記載されている。たぶんこのことであろう。しかしそこに添えられている図面(「日本彫刻基礎資料集成 平安時代」83頁掲載 東寺蔵清書本資料)を見ると桁行き9間の図になっている。古建築の規模を表す間面表記では、次のように記載するとある。「古代の建物は梁間方向にあまり広がりをもたなかったため、身舎の桁行柱間数と身舎に取り付く庇の数でおよそその規模を把握することができた。このため『○間○面』という規模表記が用いられた。間は身舎の桁行柱間数、面は身舎の○面(=○方向に庇が取り付くという意味。)唐招提寺講堂は桁行き柱間数が7で、四方に庇が付くので7間4面になる。(唐招提寺講堂桁行きは実際9つの柱間あり…筆者加筆)」¹⁸⁾(後藤治)これによれば、実際に柱間が9あったとしても、一回り庇が取り付いていると考えると7間4面という表記になる。「東宝記」講堂の條に記載された規模は、この表記の仕方に習ったとみえる。従って、講堂は創建時より縮小されてはいないを見たのだが、いかがであろう。そして、「不灌鈴等記」¹⁹⁾(平安時代)では大日如来を取り巻く4如来の位置がずれていたり、「東寺金堂講堂灌頂院本尊座位」²⁰⁾によると、4如来が東西向かい合っていたとある。それに梵天帝釈天の東西位置が逆であったりする、が、四天王の位置は変わっていない。ということは、東寺講堂四天王像の配置も創建当初のままであり、その傾きは、この講堂内部の空間に、あわせて仕組まれたものだという事だ。即ち「迎角」は意図的に作られたものと判断した。

6 東寺講堂四天王像の「迎角」に連なる事例

6-1 「迎角」のしくみ

これまで見てきたように、像が、置かれた場所によって、見え方が変わる。そこで、彫像そのものの傾斜を工夫して、より良い形に見せていくという、大胆な発想に、東寺講堂で出会った。これはある意味で、拝観者の立ち位置と、拝観される対象である彫像との関係を、考えて試みられた、造形的な工夫である。簡単な図で説明したい。

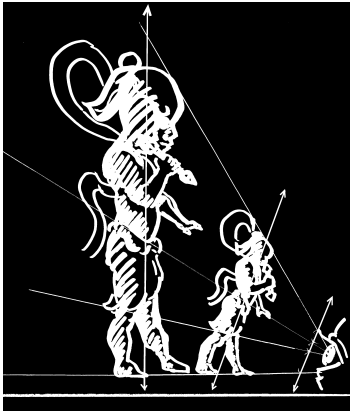


図8-1 (筆者)

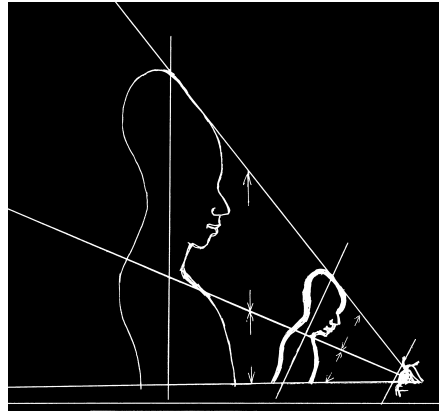


図8-2 (筆者)

図8-1、8-2を見てほしい。目は拝観者である。見あげている仰角を持つ目に正対している手前の像は上下自然な割合である。ところが垂直に立ち上がる奥の像は、激しく比例が変わる。上部が巨大になる。こうしないと、拝観者の目からは自然に見えない。東大寺南大門仁王像は、このように、上部を大きくして、下からの拝観者の視線に応えたのである。一方、東寺講堂四天王像持国天などは、図8の手前の像のように、前に倒して、目と正対させたのである。では東寺講堂の後方に立つ多聞天、広目天はどうかといえば、先述の原理から、後方が、遠くなれば、一層小さくなることを考え、スケールが出るように、後傾して上向きに視線を上げたのである。上向きにすれば大きな像のように下から見上げる角度が得られる。見あげさせて大きく見せるのだ。そのために、後方に倒してみせたのであり、彫像の目の向く先が拝観者まで届くようにしたのである。こうした、視覚に対応した、「迎角」の例を、二つ、最後に加えて、これらの考え方が、仏像造像において、自然に行われていた例証とする。

13

6-2 白山比咩神社十一面観音菩薩像²¹⁾の後傾(鎌倉時代 銅鑄造 像高23.4cm)

写真を見てほしい。見事に後傾している。その傾斜は膝前にも同じにつけられている。即ち背の面とその反対の膝前の面は平行である。この肉付きの自然な美しい小像は石川県白山比咩神社から発掘されたものだ。そしてこの後傾が、何故つけられてい



図9-1



図9-2

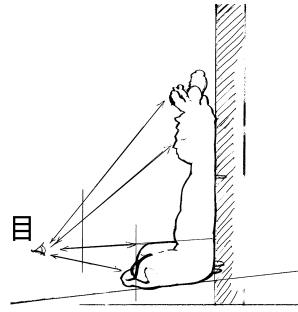


図9-3 (筆者)

* 図9-1～9-2は東京国立博物館資料N171014、N171076

るかが問題である。背を見ると突起がついている。この調査報告書 (MUSEUM554号資料参照) によると、鏡についていた懸け仏とのことである。となると背中では垂直に鏡面に取りつけられる。すると胡座をした膝前はやや下方に下がる。そのおかげで膝前の面が斜めではなく垂直になり、正面性が明瞭になる。この膝前、垂直面に正対するところに最良の角度が生まれる。この像は、高いところに懸けられていたが為に、低い位置から見あげる拝観者の視線に応えたものだという記載が報告書にある。筆者の考えを裏づけてくれる一文である。「迎角」を持つと判断した。

6-3 佐渡国分寺南大門内の地藏菩薩像²²⁾ (地藏菩薩、石造、造像年代不詳)

地藏の写真、[図10-1](#)と[10-2](#)を見比べてほしい。どちらが正面であろうか。この地藏は2メートル以上の大きさを持つ立派なものだ。だが、由来や造像時期など不明である。この像が有している、ある種トリッキーでもある造形上のしくみは極めて明解である。[図10-1](#)の左右がアンバランスな方が、正面から撮影したものである。[図10-2](#)を見てほしい。向かって右下から見上げるように撮影したものだ。左右がきちんとバランスがとれている。この地藏は、南大門を入ると、すぐ左側に3メートルほどの小高い塚状の盛り土がある。その上に立てられている (写真、[図10-3](#))。従って、参道から斜め左上に見あげた時、像の中心が真中になるように、正面から見ると、向かって左が幅広く、右が狭く造られているのだ。この見事な視覚トリックは、地藏が参道を通る拝観者の視線に正対していないために、左右の幅を変え、斜め下から見あげた時にあたかも均等に左右が整い、正対しているように見せているのだ。その意味では錯視的「迎角」である。

以上二つ見てきたが、共に拝観者の目の位置を想定して造られた大胆な傾斜であり、比例である。東寺とは異なる、優れて明快な「迎角」の工夫例と見た。

佐渡国分寺地藏

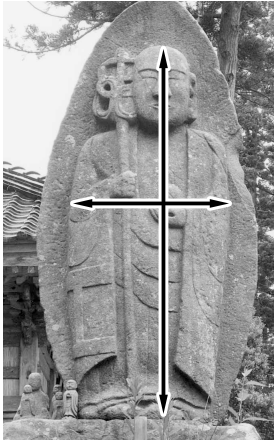


図10-1 正面



図10-2 斜め下から



図10-3 参道から

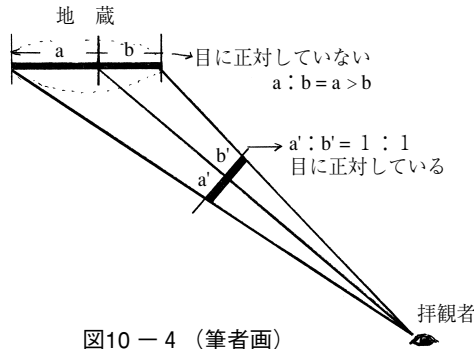


図10-4 (筆者画)

7 今後の課題

仏像が長いその造像の歴史の中で、いかに人々の目に応えるべきかを考え、工夫し、生みだしてきた技は、時代により、地域により、多種多様にあると思われる。それらの中で、実に、仏像故に、明瞭に現れる極めて興味深い事柄が、巨大な像を下から排する時に、美しく見えるように比例を変えるような操作だ。これは、射影的原理でもあり、遠近法的しくみを踏まえた人間の視覚認識の問題への挑戦でもある。その結果、ある方向に見せ場を作れば、どこかに不自然さが生まれる。そこに興味深い仕掛けが現れる。そこに仏像ならではの秘密が生まれる。それを筆者は「迎角」として探してきた。そして、これからさらに調査したい仏像や、調査したいことがある。実は本論考で、最も重要なことを書いていない。それは、東寺講堂四天王像の最良のアンクルそのものである。須弥壇前の拝観者の位置に、最良のアンクルが在るようにしくんである、と言うに留めた。しかし、その拝観者の立ち位置が、東西の間のどこにあるかについては、述べることを控えた。実際に東寺講堂内部調査の許可を得て計測と撮影をして初めて言及することだ。そして、それこそ、空海の意図した講堂立体曼陀羅の

本来の姿との対面を実現する方法ではないかと密かに期待している。今後の研究の楽しみな課題である。さらにこうした特異な傾斜を持つ仏像がまだまだ多数待っている。東大寺誕生釈迦像の後傾、法隆寺48体仏に多い後傾、法隆寺宝物館飛鳥時代菩薩立像の後傾、興福寺国宝館千手十一面観音菩薩像の前傾、平等院鳳凰堂の雲中供養菩薩像の前傾など枚挙に暇がない。実に興味深いものばかりだ。今後の研究に待ちたい。

【文献資料】

1) 鑑賞教育について

谷口幹也 他企画・執筆「子どもは美術で何を学ぶの」SoVA2005 鳴門教育大学芸術系(美術)教育講座 橋本泰幸研究室 2006年3月25日発刊

「鑑賞のダイナミズムー子どもが変容する学びとはー」SoVA2006 前掲書 2007年3月25日発刊

「交響体、連動するアート教育」SoVA2007 前掲書 2008年3月31日発刊

2) アレナス・アメリア著〈Arenas Amelia〉福のり子訳「ナゼコレガアートなのなぜ、これがアートなの？」原書名：IS THIS ART : A GUIDE FOR THE BEWILDERED (Arenas, Amelia) 川村記念美術館監修(京都)淡交社 1998年2月19日出版

3) 「中等美術科教育指導要領」平成10年度 文部科学省

4) 水野谷憲郎著「生な鑑賞による意識の変容(鑑賞学習としての修学旅行)」東京学芸大学 附属小金井中学校研究紀要32号 97頁～126頁 1996年3月発刊

5) 水野谷憲郎著「生な鑑賞による意識の変容」前掲書 99頁

6) 前田泰次著「奈良の寺」14巻「東大寺 大仏と大仏殿」所収「大仏創建とその期の変遷」岩波書店 1974年9月発刊 15頁～16頁

7) 大橋一章著 薬師寺東院堂聖観音菩薩立像「法隆寺・薬師寺・東大寺論争の歩み」グラフィ社 2006年4月

川口信彦著「蟹満寺釈迦如来座像及び薬師寺東院堂の聖観音像を中心とする素材と技法に関する研究」東京学芸大学研究報告、第7分冊」15 1964年3月25日東京学芸大学発刊 1頁～11頁

川口信彦著「蟹満寺釈迦如来座像及び薬師寺東院堂の聖観音像を中心とする素材と技法に関する研究」東京学芸大学研究紀要 第5部門」18 1967年1月 東京学芸大学発刊 101頁～107頁

久野 健著『白鳳の美術』1978年4月発刊 六興出版 95頁～110頁「5. 薬師寺東院堂の聖観音像」

8) 西村公朝 熊田由美子著「運慶 仏像 彫刻の革命」とんぼの本 新潮社 4頁～10頁 61頁～67頁

9) 根立研介著「天下復々彫刻ナシ 運慶」ミネルバ書房 129頁～147頁

10) 丸山士郎著「東寺講堂諸像と承和前期の作風」MUSEUM532号 東京国立博物館 2006年7月発刊 17頁「…尊格の低い四天王像が最後に造像された可能性がある」

- 井上 正著「1. 講堂諸尊像 京都 教王護国寺／四天王像」『日本彫刻史基礎資料集成 平安時代 重要作品篇1』1973年7月30日 中央公論美術出版 32頁～39頁
- 伊東史朗著「国宝解説/四天王立像」『週刊朝日百科 日本の国宝』65 京都・教王護国寺 (東寺) 1 1998年5月24日 朝日新聞社 148頁～150頁
- 倉田文作著「教王護国寺講堂持国天像」『仏像の像内と納入品 併せて 木彫像の構造論』やさしい美術の話 1965年7月1日 熱海商事 25頁～27頁
- 11) 丸尾彰三郎他著「日本彫刻基礎資料集成 平安時代」講堂創建 58頁～65頁
 - 12) 井上 正著「日本彫刻基礎資料集成平安時代」四天王像 37頁～37頁「各尊の現在の配置は十世紀の眞寂「不灌鈴等記」…の記述に見るものと変わらず創立当初のさまを踏襲すると考えられる」
 - 13) 井上 正著「日本彫刻基礎資料集成 平安時代」四天王像 33頁 法量
 - 14) 鈴木嘉吉他著「東寺の建造物」128頁 講堂梁行き断面図
 - 15) 鈴木嘉吉他著「東寺の建造物」前掲書 40頁 I 東寺の古建築 8 講堂
 - 16) 丸尾彰三郎他著「日本彫刻基礎資料集成 平安時代」所収「伝来 1. 東寺草創41頁」
 - 17) 真鍋俊照著「空海のことばと芸術」NHKライブラリー 講堂 139頁
 - 18) 後藤 治著「国宝の美01」創刊 寺社建築の見方
 - 19) 井上 正著「日本彫刻基礎資料集成平安時代」前掲書 四天王像 37頁～37頁
 - 20) 井上 正著「日本彫刻基礎資料集成平安時代」前掲書
 - 21) 加島 勝著「石川・白山比咩神社境内出土銅造十一面観音菩薩坐像」MUSEUM554号 東京国立博物館発刊 10頁7行目～10行目「本像の側面観がかなりつよく後傾した姿勢であることも、本像が懸仏として社殿内の高い位置に掛けられた際、これを下方から仰ぎ見たときの視覚効果を意識しての造形とみなすことが可能で」
 - 22) 佐渡国分寺関係者「まだ調査研究されていない。地蔵そのものは古いものとの伝承はあるが実際いつ頃であるか不明。小高い土盛りは塚であるとの説がある。がこれも調査されていない。ただ佐渡には地蔵が3千体からあり、特に江戸になってから造られている。また木喰上人も来て多数仏像をのこしているがその中には石仏もあり、木喰上人との関りも興味深い」

***挿入図資料について**

[図1-2AD、図1-3EH、図4-1～4-3、図6-1、図7-1、図7-2] 東寺の許可を得て「日本彫刻基礎資料集成 平安時代」より掲載

[図5-1、図6-2] 東寺の許可を得て「東寺 講堂立体曼陀羅」より掲載

[図1-2BC、図1-3FG、図2、図3、図5-2、図8-1、図8-2、図9-3、図10-4] 筆者作図

[図9-1、図9-2] 東京国立博物館資料N171014、N171076より

[図10-1、図10-2、図10-3] 佐渡国分寺の了解のもとに筆者撮影